

第 160 回東邦医学会例会 予稿集

令和 4 年 6 月 15 日(水)

A. 大学院生研究発表 (No.1~5)

No.1

在留ブラジル人生徒及び日本人生徒におけるメンタルヘルスと異文化適応との関連についての研究

福井 英理子(社会環境医療系精神神経医学)

指導教授:根本 隆洋(精神神経医学講座)

群馬県にある学校法人桐丘学園桐生第一高校 1 年生・3 年生合計 70 名と、同県のブラジル人学校日伯学園 9 年生～12 年生の日系ブラジル人生徒 26 名を対象に、メンタルヘルスの健康度と異文化適応・民族的アイデンティティについてのアンケート調査を実施し比較検討を行った。解析の結果、ブラジル人生徒では学校や日常生活における悩みが高く、民族的帰属意識とメンタルヘルスの健康度との関連が示唆された。

No.2

妊娠中の女性のメンタルヘルスと表情認知機能の関連

田久保 陽司(社会環境医療系精神神経医学)

指導教授:根本 隆洋(精神神経医学講座)

済生会横浜市東部病院産婦人科で出産予定の 72 名の健常妊婦を対象として、妊娠中期に自記式評価尺度と表情認知機能検査を施行し、相関分析で統計解析を行った。大人の表情を対象とした表情認知機能と抑うつ、ボンディングに有意な相関は認められなかった。一方、子どもの表情を対象とした表情認知機能と抑うつには中程度の相関が認められ、抑うつが強まると子どもの表情をより嫌悪として捉える傾向が認められた。

No.3

体幹部定位放射線療法におけるゴールドマーカーの各区域気管支における固定率

今坂 圭介(生体応答系呼吸器内科学)

指導教授:岸 一馬(内科学講座呼吸器内科学分野(大森))

肺腫瘍への体幹部定位放射線療法において、済生会横浜市東部病院では病変の呼吸性移動に対する動体追跡用に経気管支的にゴールドマーカーを留置している。2011 年 11 月から 2020 年 11 月までに留置された計 791 個のゴールドマーカーについて、区域気管支単位の留置位置、時間経過と固定/脱落を分析した。結果、両側肺で上葉のゴールドマーカー固定率は有意に低く、また左肺上葉では B¹⁺²の固定率が B³より有意に低いことが判明した。

No.4

細胞診検体を対象とした AI による肺癌の遺伝子変異予測モデルの構築

石井 脩平(生体応答系病理学)

指導教授:三上 哲夫(病理学講座)

現在、肺癌治療を行うにあたり組織検体を用いて遺伝子情報を検索する機会が増えている。今回、細胞診画像を対象として AI による遺伝子変異(EGFR, KRAS, ALK)予測が可能か検討し、構築したモデルが根拠とした細胞像を考察した。構築したモデルで EGFR 変異は高精度で予測可能であった。変異推定の根拠として重要視された細胞像の多くは既報告の細胞所見と一致していたが、新たな知見も得られた。

No.5

バルーンガイドリングカテーテルの誘導性能、支持性能に関する比較実験

松本 崇(高次機能制御系脳神経外科学)
指導教授:岩淵 聡(大橋病院脳神経外科)

3種類のガイドリングカテーテルについて、誘導性能、支持性能を評価する機械的実験を施行した。人工血管モデルとリニアアクチュエーターを用い同一条件で実験を行った。誘導性能についてはガイドリングカテーテルを右内頸動脈へ誘導し、到達距離、その際に生じた抵抗等々を評価した。支持性能については、ガイドリングカテーテル内に通したインナーカテーテルを血管モデルの壁に押し当て、その反作用への抵抗や滑落距離を比較した。

B. 分科会報告 (No.6)

No.6 (佐倉神経精神セミナー)

透析と高齢者脳疾患

榊原 隆次(佐神内)

高齢透析(HD)患者のせん妄の背景疾患は十分に明らかにされていない。本検討の結果 HD(n=133)の平均年齢 67 歳、37.6%が認知症サポートチーム(DST)受診(年齢 \geq 65 歳[高齢]62.4%, $p<0.05$)、このうち誤嚥性肺炎 30%、身体抑制 23.3%、転倒関連手術 16%、背景疾患は白質型多発性脳梗塞(WMD)+アルツハイマー病(AD)(80%)が多く、一部レビー小体型認知症もみられ、ケアの観点から留意すると良いと思われた。

C. 柴田洋子奨学助成金・柳瀬武司奨学基金受賞講演(No.7~8)

No.7 (柴田洋子奨学助成金受賞講演)

The influences of gender and aging on optic nerve head microcirculation in healthy adults

小林 達彦(大森眼科)

性差、加齢はレーザースペックルフローグラフィで求める視神経乳頭(OH)領域の平均 mean blur rate (average MBR)と負の相関を示すことが報告されている。今回我々は性差、加齢が MBR へ与える影響の差異を多数健康人で検討した。単変量解析にて性差と Max MBR、加齢と Min MBR が最も強い相関を認め、性差・加齢の average MBR への負の相関は、性差は Max MBR、加齢は Min MBR 低下を介した現象であることが示された。

No.8 (柳瀬武司奨学基金受賞講演)

機能性めまいにおける心理的要因を介した病態解明の研究

橋本 和明(心身医学講座)

機能性めまいの病状には心理的要因が影響するが、病態メカニズムの殆どは未解明である。我々はまず、機能性めまいの症例において病状と身体感覚増幅の関連を検討し、正の相関関係について明らかにした。次に機能性めまいの概念として提唱された Persistent Postural-Perceptual Dizziness において、重篤な心身症で認められる中枢性感作が病状に関与する可能性について明らかにした。

D. 研修医発表(No.9)

No.9

発症早期から治療介入を要した成人 Still 病の一例

古山 ゆりあ(大森初期研修医)

指導:小松 史哉(総合診療・救急医学講座)

69 歳女性。発熱、全身倦怠感、咽頭痛を主訴に来院した。サーモンピンク疹、好中球主体の白血球増多、肝酵素上昇、フェリチン高値を認め、感染症・悪性腫瘍・その他の自己免疫疾患は否定的であることから成人 Still 病の診断となり、第 4 病日から治療を開始した。経過中に心膜炎・心筋炎を併発したが、ステロイド療法、免疫抑制療法で奏功が得られた。発症早期から治療介入を要した症例を経験したため、文献的考察を加えて報告する。

E. プロジェクト研究報告(No.10)

No.10

未熟児網膜症治療後の眼球構造と視機能についての評価

松村 沙衣子(眼科)

前眼部光干渉断層計(OCT)を用いて未熟児網膜症のレーザー(LPC)治療眼の構造的特徴と屈折異常との関連性を検討した。LPC 治療群の構造変化として、急峻な角膜曲率、短眼軸長、厚い水晶体、小さい前房容積が認められた。多変量解析の結果、LPC 照射数が小さい前房容積の独立した因子であった。OCT による前眼部因子は円柱度と有意に相関を認め、LPC 治療後の眼球構造変化は円柱度数に影響することが示唆された。

G. 大学院生研究発表(No.12~17)

No.12

小児期に発症した原発性硬化性胆管炎の予後に関する研究

梅津 守一郎(生体応答系生育肝臓消化器学)

指導教授:乾 あやの(医学研究科成育肝臓消化器学)

原発性硬化性胆管炎(PSC)は成因不明かつ予後不良な疾患である。本邦での小児期に発症した PSC の長期予後は不明な点が多いため、小児例の臨床的特徴について後方視的に検討を行った。予後との関連ではいわゆる自己免疫性肝炎とのオーバーラップ症例において悪化が顕著であり、成人例や欧米の既報と異なる特徴であった。今後、レジストリクスシステムを構築し本邦の実態調査を予定する。

No.13

急性腹部感染症における自動多項目同時遺伝子システム FilmArray®の有用性に関する検討

柿崎 奈々子(代謝機能制御系臨床腫瘍学)

指導教授:渡邊 学(大橋病院 外科)

穿孔性腹膜炎などの急性腹部感染症は致死的となり得るため、迅速な起炎菌同定及び適切な抗菌薬選択が必要となる。今回、穿孔性腹膜炎・腹腔内膿瘍における腹腔内サンプルを対象に、Bio Fire 社の FilmArray®, Blood Culture Identification panel を用いて評価を行った。また同一検体に対しメタゲノム解析による定量的評価を加えその有用性を検証したので報告する。

No.14

副鼻腔炎手術症例における吸入抗原感作の検討

井上 なつき(高次機能制御系耳鼻咽喉科学)

指導教授:吉川 衛(大橋病院)

ダニや真菌などの吸入抗原の感作は、気管支喘息の発症や重症化に関与することが知られているが、副鼻腔炎患者における吸入抗原の感作状況を検討した報告は少ない。今回、慢性副鼻腔炎手術患者について、特異的 IgE 抗体検査の陽性率を調べ、術後再発の有無や気管支喘息の合併の有無で層別化して比較検討した。気管支喘息合併患者ではダニ、ネコ、真菌の陽性率が高く、再発患者ではシラカンバ、ネコの陽性率が高い結果となった。

No.15

解剖学的人工肩関節全置換術の治療成績—グレンノイドコンポーネントの X 線透過性の評価—

阪元美里(高次機能制御系整形外科学)

指導教授:池上博泰(東邦大学医学部整形外科学講座(大橋))

当科では変形性肩関節症の腱板機能が保たれている症例に対し解剖学的人工肩関節置換術(以下、ATSA)を行っている。ATSA においてはグレンノイドコンポーネントの Loosening は術後成績を大きく左右する。今回術後 5 年以上経過した症例の術後成績と X 線透過性を検討した。ATSA の術後成績は良好であり再置換例はなかった。X 線透過性の評価には CT が有用であった。上方の peg の X 線透過性は Loosening の初期変化を表している可能性があった。

No.16

Wilson 病患者の自立生活状態に関連する診断時の因子の検討

雨宮 歩実(生体応答系小児科学)

指導教授:清水 教一(小児科学講座(大橋))

Wilson 病計 308 症例を対象に、自立生活状態に関連する診断時の因子の検討を行った。修正ポワソン回帰分析の結果、関連(調整済みリスク比及び 95%信頼区間)が示唆されたのは、神経症状(重症: 3.63, 2.28-5.77, 軽症: 3.20, 1.96-5.23)、脾腫(2.57, 1.26-5.24)などであった。診断時に神経症状を有する症例に対しては、初期治療より十分な除銅治療を行うことが望まれる。

No.17

The effect of organized screening introduction on behavioral changes of receiving mammography examination: A cross-sectional study in Serbia

谷垣 佳奈子(社会環境医療系医療政策経営科学)

指導教授:長谷川 友紀(社会医学講座医療政策経営科学分野)

セルビア共和国において、乳がん検診は喫緊の課題である。今回、乳がんの組織型(対策型)検診の導入が検診対象者のマンモグラフィ検査の受診に向けての関心や行動変容に及ぼす影響について明らかにすることを目的とし、50~69歳の女性を対象としてアンケート調査を実施した。その結果、組織型検診導入地域において、非導入地域に比して受診を経験した者と定期的に受診している者の割合が有意に高いことが明らかになった。

令和4年6月16日(木)

I. 当番教室企画(No.18)

No.18

「医療の歴史—世界に名を残した7医人—」

木村 丹(岡山県 木村医院)

東邦大学医学部昭和52年卒業, 日本医史学会会員, 岡山医学史研究会会員

「医学・医療の歴史の中に未来に繋がる示唆が煌めいている」といわれます。

明治中期、日本が富国強兵に全力を注いでいる頃、ドイツに留学、様々な細菌の発見、免疫療法の確立により日本の地位を向上させた北里柴三郎(1853-1931)について。続いて、現在の日常診療の基本である血圧測定の起源、ワクチンの黎明、ペニシリン開発、「腓」を造字、日本に西欧医学を導入、そしてギリシャの医神(アスクレピオス)について、人物と周辺のエピソードについて紹介します。

K. 柴田洋子奨学助成金・柳瀬武司奨学基金受賞講演(No.20)

No.20 (柳瀬武司奨学基金受賞講演)

異所性脂肪蓄積と組織特異的インスリン感受性に着目した NAFLD 合併早期 2 型糖尿病の治療戦略

蛭間 重典(東邦大学内科学講座糖尿病代謝内分泌学分野)

糖尿病治療薬の SGLT2 阻害薬と DPP-4 阻害薬について、異所性脂肪蓄積と組織特異的インスリン感受性に着目して初めて直接比較検討した。NAFLD が併存している 2 型糖尿病患者に対して、SGLT2 阻害薬は DPP-4 阻害薬と比較し、12 週間の投与で肝脂肪蓄積を有意に減少させた。一方で体重減少と共に筋肉量減少も来たしていたため、フレイルが懸念される患者に対しては DPP-4 阻害薬も選択肢になると考えられた。

L. 研修医発表(No.21~22)

No.21

胸水貯留、心嚢液貯留で紹介受診となった高齢女性が SLE と診断された一例

正木 那実(大森初期研修医)

指導:山田 篤史(総合診療内科)

乳癌の既往歴のある ADL 自立した 66 歳女性。1 ヶ月前から持続する発熱、胸痛、食欲不振にて前医を受診し、炎症反応高値、CT 上胸水貯留、心嚢液貯留を認め紹介受診した。漿膜炎、汎血球減少、抗核抗体陽性などから SLE が鑑別に上がったが入院後自然経過で症状改善したことから治療介入せず外来にて経過観察となった。その後関節痛をみとめ SLE の診断となった。

No.22

黄疸を伴った悪性貧血の一例

井上 直人(大森初期研修医)

指導:佐々木 陽典(総合診療内科)

73 歳男性。労作時息切れ、Hb4.2g/dL の精査目的に紹介受診。全身の黄染と蒼白が顕著で、MCV127.2fL、T-Bil3.7mg/dL、inD-Bil3.5mg/dL、LDH 2166U/L と大球化と溶血または無効造血が疑われた。血清ビタミン B12<50pg/ml であり、上部消化管内視鏡で高度な萎縮性胃炎を認め、尿素呼吸気試験陰性かつ抗壁細胞抗体陽性であることから悪性貧血と診断した。

M. 研修医発表(No.23~25)

No.23

体重減少精査目的に受診し進行性核上性麻痺の診断に至った一例

竹原 小百合(大森初期研修医)
指導:山田 篤史(総合診療内科)

誤嚥性肺炎は高齢者の **common disease** の一つである。しかしその背景には誤嚥性肺炎を引き起こす別の疾患が隠れている場合がある。そのため単に肺炎を治療するだけでなく、背景に何らかの疾患が存在する可能性を考慮して診察することが大切である。今回体重減少を主訴に受診し肺炎像を認めた 78 歳男性で、詳細な身体診察を行ったところ進行性核上性麻痺の診断に至った一例を経験したため報告する。

No.24

亜急性の経過を辿り診断に苦慮した高齢発症の関節リウマチの一例

阿部 雄一(大森初期研修医)
指導:佐々木 陽典(大森病院総合診療・救急医学講座)

古典的な関節リウマチは、中年女性に好発し、慢性経過の MP・PIP 関節を中心とした多関節炎を呈する。一方、高齢発症関節リウマチ(EORA)は男性にもしばしば発症し、発熱、急性大関節炎など多彩な症状を呈することがあり、急性単関節炎でも EORA を鑑別に挙げる必要がある。蜂窩織炎を契機に入院し、亜急性に進行する下肢脱力や「しびれ」を呈して EORA の診断に至った症例を経験したので報告する。

No.25

胃潰瘍治癒後に幽門通過障害をきたした一例

柴田 航平(大森初期研修医)
指導:斎藤 隆弘(大森病院 総合診療内科)

72 歳女性、主訴はめまいであった。今回入院の一ヶ月前に胃潰瘍による幽門通過障害にて入院され絶食補液後食事再開し退院した。外来にてピロリ菌一次除菌療法を施行後、食後の嘔吐症状が再燃し入院となった。病歴より幽門の通過障害が再燃したと考え上部消化管内視鏡検査を行ったところ以内に多量の残渣と幽門狭窄を認めた。幽門狭窄部に対しバルーン拡張術を行い、食事開始、嘔吐症状の再燃がないことを確認して退院となった。

N. プロジェクト研究報告(No.26)

No.26

肺 *Mycobacterium avium* complex 症治療導入後の病原微生物混合感染の臨床的意義の検討

ト部 尚久(呼内)

肺 MAC 症において治療導入後の他の病原微生物混合感染の影響は明らかにされていない。今回、肺 MAC 症治療導入後の混合感染群と非混合感染群の治療効果・画像所見を比較検討した。両群で MAC の治療効果に差は認めなかったが、胸部 CT 画像所見では混合感染群で悪化した症例を有意に多く認めた。

O. 大学院生研究発表(No.27)

No.27

Emergence of meropenem-resistant mutants during meropenem treatment for borderline meropenem-susceptible carbapenemase-producing and non-carbapenemase-producing Enterobacterales in the hollow-fiber infection model and genomic characterization by whole-genome sequencing

遠藤 裕子(旧姓:堤 裕子)(生体応答系微生物・感染制御学)
指導教授:石井 良和(微生物・感染症学講座)

ブレイクポイントの境界で meropenem (MEPM) に感性を示す IMP-6 型カルバペネマーゼ産生および CTX-M-2 型基質特異性拡張型 β -ラクタマーゼ産生の腸内細菌目細菌における MEPM 1g 8 時間毎投与の有効性を hollow-fiber infection model を用いて評価した。いずれの菌株も治療中に MEPM 耐性株が出現した。前者は *bla*_{IMP-6} 搭載プラスミドコピー数の増加に伴う IMP-6 産生量増加、後者は染色体上の外膜遺伝子 *ompC* の欠失と *bla*_{CTX-M-2} の三重複による CTX-M-2 産生量増加が、それぞれ MEPM 耐性化に寄与したことが示唆された。

P. 大学院生研究発表(No.28~29)

No.28

心不全入院患者における右脚ブロック(RBBB)の存在と予後予測

佐野 隆英 代謝機能制御系循環器内科学
指導教授:池田 隆徳(内科学講座循環器内科学分野)

心電図検査における RBBB の存在は健常者において良性の所見とされており、経過観察とされることが多い。しかし近年、海外において心血管疾患を有する患者の RBBB の存在は全死亡を増加させると相次いで報告されているが、本邦からの報告は未だない。今回我々は、当科に心不全で入院した患者を後ろ向きに解析し、RBBB の意義について検討した。その結果、RBBB は主要有害心血管イベントに加え心不全再入院を有意に増加させた。

No.29

EAN における siponimod の効果に関する検討

内 孝文(高次機能制御系神経内科学)
指導教授:藤岡 俊樹(内科学講座神経内科学分野(大橋))

Siponimod は実験的自己免疫性脳脊髄炎において良好な治療効果を上げている。今回、実験的自己免疫性末梢神経炎(EAN)に対する治療効果を検討した。Siponimod 投与により運動障害度が軽減し、回復期に末梢神経内の脱髄病巣周辺の Schwann 細胞の c-Jun の発現が増加した。Siponimod はリンパ球の遊走抑制だけでなく、増殖遺伝子発現の増加が重症度の差に寄与したと考える。

令和4年6月17日(金)

Q. 大学院生研究発表(No.30~31)

No.30

涙液および角膜上皮と硫酸イオンの関係性について

齋藤 智彦(高次機能制御系眼科学)
指導教授:堀 裕一(眼科学講座)

眼表面のバイオマーカーを探索するために、健常人の涙液中陰イオンの測定を行ったところ、硫酸イオンが検出された。この硫酸イオンが、何に由来し、どのような役割を持っているのか調べるため、ビーグル犬を用いて血液中と涙液中の陰イオン動態の比較を行った。さらに硫酸基と培養角膜上皮細胞の関係性について、検討を行った。

No.31

潰瘍性大腸炎に対する Ustekinumab の有効性について

木村 道明(代謝機能制御系消化器内科学)
指導教授:松岡 克善(佐倉病院内科)

難治性潰瘍性大腸炎に対する治療は近年大きく進歩しており多くの分子標的薬が使用されている。Ustekinumab は大規模臨床試験によって潰瘍性大腸炎に対する有効性が報告されているが、実臨床での有効性、安全性を示す報告はまだ少ない。そこで、当院で Ustekinumab を使用した潰瘍性大腸炎の患者について、その有効性と安全性について診療録を用いて検討した。

R. 研修医発表(No.32~33)

No.32

治療抵抗性のハイリスク高齢者心房細動の一例

小山 真(大森初期研修医)
指導:小原 浩(循環器内科)

症例は 80 歳代の男性。下肢浮腫を主訴にうっ血性心不全の診断で入院となった。心不全の病因は虚血性心疾患及び、持続性心房細動で、脳梗塞、静脈血栓症、ならびに 2 型糖尿病を併存しており polypharmacy 状態であった。加えて大腸憩室出血による複数回の出血イベントがあり、内服薬の減量・減薬をすることで加療を進めた。梗塞あるいは出血の観点からハイリスク高齢者心房細動の一例を経験したので報告する。

No.33

急速に胸腹水貯留が増悪した高齢発症 SLE の1例

有上 周佑(大森初期研修医)
指導:小松 史哉(総合診療内科)

61歳女性。3年前からの持続的蛋白尿が精査されておらず、急速に胸腹水貯留が進行し、発熱と呼吸困難が出現したため搬送された1例を経験した。入院後、高齢発症 SLE の診断でステロイドパルスおよびシクロホスファミド静注療法が開始され、症状は改善した。若年発症 SLE と高齢発症 SLE の違いや、ネフローゼ症候群について本症例にあてはめながら考察した。

S. 柴田洋子奨学助成金・柳瀬武司奨学基金受賞講演(No.34～35)

No.34 (柴田洋子奨学助成金受賞講演)

涙小管炎の成因について

岡島 行伸(大森・眼科)

涙小管炎は涙小管に結石を伴う感染症で慢性に持続する眼脂をときに角膜穿孔を起こす疾患である。原因菌として *Actinomyces* の存在が指摘されていたが嫌気性菌のため培養困難であり病原菌の特定は困難であった。次世代シーケンスを用いたメタゲノム・ショットガンシーケンス解析をもちいて遺伝子レベルで解析した。嫌気性菌 *Actinomyces* 属 15 眼、*Propionibacterium* 属と *Parvimonas* 属が 11 眼、*Prevotella* 属 9 眼、*Fusobacterium* 属 6 眼、*Selenomonas* 属 5 眼、*Aggregatibacter* 3 眼、通性・好気性菌 *Streptococcus* 属 13 眼、*Campylobacter* 属 6 眼、*Haemophilus* 属 3 眼が検出された。結石は嫌気性菌と通性好気性菌の混合感染であった。これらの検出菌はバイオフィーム形成が特徴である歯周病の原因菌と類似していた。今後涙小管炎予防や治療のヒントになるのではないかと期待される。

No.35 (柴田洋子奨学助成金受賞講演)

Optimizing the direction and order of the motion unveiled the ability of conventional monolayers of human induced pluripotent stem cell-derived cardiomyocytes to show frequency-dependent enhancement of contraction and relaxation motion

中瀬古(泉) 寛子(医学部薬理学講座)

ヒト iPS 細胞由来心筋細胞の単純 2 次元細胞シートにおいて、電氣的興奮、収縮および弛緩が同じ領域から始まるよう電気刺激位置を工夫することによって生理的な陽性階段現象を表出できた。

T. プロジェクト研究報告(No.36～37)

No.36

レヴィ小体病における唾液腺 MIBG 集積の検討

蝦名 潤哉(脳神経内科)

レヴィ小体病(LBD)の早期診断・病態解明に頭蓋外イメージングの重要性が示唆されている。我々は LBD 群と非パーキンソニズム対照群の顎下腺・耳下腺・心臓における MIBG 集積を比較した。LBD 群で顎下腺と心臓で有意な集積低下を認めた。一方耳下腺で集積に有意差を認めなかった。更に心臓集積と唾液腺間の MIBG 集積に相関は認められず、これらの自律神経障害は独立して進展する可能性が示唆された。

No.37

EGFR exon19 欠失変異陽性非小細胞肺癌のサブタイプ別治療効果に関する検討

吉澤 孝浩(呼内森)、大塚 創(呼外森)

当院で診断した EGFR exon19 欠失変異(ex19del)陽性非小細胞肺癌 26 例をダイレクトシーケンス法でサブタイプを解析し EGFR チロシナーゼ阻害薬(EGFR-TKI)の治療効果を検討した。ex19del の先頭部位の E746 は L747 より、EGFR-TKI の無増悪生存期間が短い傾向を認め、ex19del のサブタイプによって EGFR-TKI の治療効果に差がある可能性が示唆された。

U. 一般演題(No.38～39)

No.38

外傷性椎骨動脈損傷に対する治療経験

松崎 遼(東邦大学医学部医学科脳神経外科学講座(大森))

外傷性椎骨動脈損傷は二次的脳梗塞により予後を悪化させる。脳梗塞を発症する前に診断し得た鈍的外傷性椎骨動脈損傷 4 例にコイル塞栓術を行い良好な経過をたどったので報告する。4 例はすべて男性で、平均年齢 57 歳、椎骨動脈は完全閉塞であった。全例にコイル塞栓術が施行され、経過良好であった。鈍的頸部外傷には椎骨動脈損傷が併発することを念頭に置き、早期に神経放射線学的画像検索・コイル塞栓術を行うべきである。

No.39

高度感染条件下の SARS-CoV-2 感染における耐糖能別リスク評価

齋藤 学(東邦大学医学部内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌学分野 大森)

糖尿病は感染症の発症リスクであり、SARS-CoV-2 に感染した場合、糖尿病の病勢が重症化及び死亡率に関連する。高度感染条件下において耐糖能異常が SARS-CoV-2 感染成立の寄与因子となるか検討した。その結果耐糖能異常は発症の因子でなく、肥満度が独立した危険因子であった。

V. 分科会報告(No.40～41)

No.40 (東邦大学医療センター大橋医学会)

ICU における早期離床リハビリテーションの取り組み

下山 渉太(東邦大学医療センター大橋病院 リハビリテーション部)

近年、ICU 退出後の身体機能障害、認知機能低下が問題視され、リハビリテーションの重要性が指摘される。2018 年度から特定集中治療室管理料に「早期離床・リハビリテーション加算」が新設され、算定を開始している。2018 年 6 月～2020 年 6 月までに 334 症例(68.1±15.2 歳)に実施し、ICU 在室中に立位・歩行まで施行した症例は 50.9%と高い離床率を実現できている。今回、当院における早期離床リハビリテーションの経験と実績を報告する。

No.41 (東邦大学医療センター佐倉病院内科例会)

透析患者における NT-pro BNP と QOL の関係

山崎 恵介(佐倉病院腎臓学講座)

【目的】慢性維持血液透析患者における QOL 維持向上は喫緊の課題であり、心不全の重症度は患者 QOL に関係する。今回我々は患者 QOL と NT-proBNP の関係について調査した。

【方法】慢性維持血液透析患者 268 名を透析前 NT-proBNP の 4 分位数で群別化し、各臨床データおよび体組成検査と比較し、KDQOL-SF を用いアンケート調査を行った。

【結果】NT-proBNP 値と糖尿病、透析歴、CRP、ECW/ICW 比と正の相関を示し、NT-proBNP 値高値群 [Q4 群 (n=74) $\geq 9,300$ pg/ml] は健康関連 QOL 全項目が高度に低下していた。

【考察】維持透析環境では栄養障害および慢性炎症は細胞内外の水分バランス異常をきたし、心負荷を増悪する可能性がある。NT-proBNP 上昇は全体的な健康観を損い、患者 QOL を低下させる。